

脊髄小脳変性症患者の静的立位姿勢における神経筋制御特性の検討

田邊 裕斗¹⁾ 奥田 悠太¹⁾ 菊地 豊¹⁾ 美原 盤²⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 神経難病リハビリテーション課

2) 公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 脳神経内科

[目的] 脊髄小脳変性症 (SCD) 患者の静的立位姿勢における神経筋制御特性について検討した。

[方法] SCD 患者 20 名と健常対照 18 名を対象とした。静止立位時の重心動揺 (COP)、両側の前脛骨筋 (TA) とヒラメ筋 (SOL) の表面筋電図 (EMG) を計測した。神経筋制御特性の評価指標として COP、同側の TA と SOL の EMG より同時収縮指数 (CCI)、同側および左右 TA と SOL の筋間コヒーレンス (IMC) を算出し、SCD 患者と健常者で各指標の比較と相関を検討した。有意水準は 5% とした。

[結果] SCD 患者は、健常者と比較して有意に COP、CCI、左右 TA 間 IMC と左右 SOL 間の IMC が高値を示した。SCD の COP は左右 TA 間の IMC と有意な正の相関を示した ($r=0.55$)。

[考察] SCD 患者の静的立位姿勢は、重心動揺が大きく下腿筋の同時収縮が著しかった。また、重心動揺が高いほど左右 TA 間の同期活動が顕著であることが特徴的であった。